
大紀 創業記

山本繁一の足跡

大紀アルミニウム工業所
創業100年記念誌

発刊に際して

大紀の「紀」は紀州の「紀」！

創業者山本繁一は初等教育を終えたとすぐに和歌山県日高郡の田舎から大志を抱いて大阪へ出て来ました。その後、今から100年前の1922年（大正11年）に大紀アルミニウム工業所を創業致しました。私の祖父に当たる繁一は1890年（明治23年）の寅年生まれですから30歳代のゼロからの起業であります。当時は明治から大正への移行期で社会経済面での大きな変化があり、また第一次世界大戦下での大好況とその反動の不況といった荒波の中で様々な縁と運に恵まれて独立に至ったのです。

その辺りのいわば「創業記」をスケッチしたものが本小冊子です。ただ、なにぶん資料も少なく時代背景と重ね合わせて推測する他ない部分が多く心許ない限りですが、20代の青年のチャレンジ精神に溢れた創意工夫と行動力をくみ取って頂ければ幸いです。

当社は戦後1948年（昭和23年）を起点とした設立後の周年を記念して10年毎に社史を刊行しています。本記念誌はそれとは違った趣で纏めています。というのは100年前に創業に漕ぎつけましたが、その後の太平洋戦争前後での空白期が存在するからです。

企業は永続的に進化（深化）することを必然とします。当社は今後も100年前の創業スピリットを持続して前進し続けたいと祈念しています。

株式会社大紀アルミニウム工業所

代表取締役社長 山本隆章

発刊に際して

山本隆章

02

1 山本繁一とふるさと和歌山

08

先祖の墓と向き合う 08
ふるさとの山と道と田畑と 12
切目村で生まれ、切目小学校に学ぶ 14
繁一の小学校卒業と、兄重吉の渡米 17
自分で生きる場所へ、めざすは北米か大阪か 22

2 大阪へ、野望と志を胸に

25

海を渡る 25
大阪のまち、明かり、電車 27
荘保商店で働く 30

3 次の夢へ、新しい金属とともに

40

商売への尽きない想い 33
「アルミニウム」という貴金属——その(1) 36
生え拔きの金物屋、器物製造屋へ 40
「アルミニウム」という貴金属——その(2) 44
池田アルミは梁山泊に似て 46
青島にて、「銭流し」と「アンコロ」 50
明治から大正へ、新世界と楽天地 52

4 揺れ動いた大正初期、独立を模索

57

「欧州大戦」と大正の天祐 57
外国軍用品の製造依頼を前に 60
銅製飯盒+アルミ製水筒Ⅱ注文80万個 63
人集めの算段と独自の技術 66
アルミ水筒50万個完納、次の岐路へ 70

前途の風雲を望み、混迷の中へ	73
兄重吉に頼み込んだ借金	76
アルミニウム再生精練業に着手	79
繁一を育んだ「大阪」と「紀州」を名に	82
昭和へ、株式会社設立へ、今日へ	85

エピソード①

山本繁一社長と社員たち	90
-------------	----

エピソード②

山本繁一とふるさと和歌山	94
--------------	----

あとがき	98
主な参考文献	98

大紀創業記

山本繁一の足跡

1

山本繁一と ふるさと和歌山

先祖の墓と向き合う

キューツ、キューウィツ――。

遠くで高く鳴く、野鳥の声で目が覚めた。カーテンからほの白い明かりが透けて、部屋に入り込んでいる。枕元に置いた腕時計が薄明かりの中に見え、針は5時20分少しを指していた。

カーテンを開け、布団をたたみ、さっと着替える。いつもの長袖の白いカッターシャツに、濃いグレイのズボン。庭に出て井戸で手を洗い、口をすすぐ。部屋に

戻って神棚に手を合わせた。

手桶をもって、真新しいタオルを左肩にひょいとかけ、繁一は外に出た。昨夜にふった雨のせいか霧がかかっていた。霧は、すぐ前方に迫る山の新緑を透かすように、所どころ淡く覆っている。ここは山が近い。

家のすぐ前の県道を右に歩く。舗装されていない土と砂利の道。道の左端を歩くと、左肩に岩が乗ってきそうなほど近くに、切り立った山が迫っている。5月の朝の空気は少し冷えるが、歩くとそれも心地よい。

向かった先は墓地であった。家から南へ5分ほど歩くと、県道からわずかに左の山側に入る細い道がある。歩くたびに、ぎざぎざと木の葉の音がした。緑の季節でも落ち葉はある。水を少し含んだ場所はじゅっじゅっと鳴る。この足元の感触で、いつも繁一は「帰ってきた」と思う。この感触が10メートル近く続き、その先に代々の先祖を祀る墓がある。

山本繁一は、軌道に乗った仕事の合間を見つけては、しばしば郷里の和歌山に戻った。戻っては、山や川を眺め、特にどこへ行くでもなく墓に参り、掃除をした。

先祖や親類の墓を順に参った後に、いつもの場所に置いてあるほうきを手に墓石の周りを掃く。落ち葉がこすれあつてざっざつと音がした。それがすむと、持ってきた手桶に水を汲み、真っ白のタオルを水につけては軽く絞って墓石をこする。墓石の下の方にわずかについた苔をゴシゴシとこする。また水に浸し、今度はぎゅつと絞って墓石をこする。水を少しだけ含ませたり、たっぷり含ませたりしながら、ゴシゴシとこすり続ける。小さな声で、何かをつぶやきながらこすっている。タオルが少し茶色に、少し緑色に染まっていた。

キューツ、ウィツ——。今度は頭上で、鳥の声がした。

見上げると、靄はもう消えていた。山の緑にかぶさるように空が青い。小さな雲がひとつ、山のすぐ右にあるほかは、空はすべて青かった。腕時計を見ると、針は

7時少し前。道具を片付け、来た道をゆつくりと戻った。

郷里に戻った翌日は、いつもこうやって時を過ごした。思いつけば、昼や夕方にも墓に来た。

「とても丁寧に、お墓を掃除していました。故郷に帰ってきたときは必ず」。繁一の姪にあたる山本幸子は、そんな話を子どもたちにもよくした。遠くを見ながら、懐かしそうに話した。



繁一の生家近くに広がる山と空

ふるさとの山と道と田畑と

山本繁一は、1890（明治23）年11月、和歌山県中部の山あいの小さな村で生まれた。日高郡切目村大字島田小字楠本。生家から南西の方角に30分と少し歩けば、熊野参りの安全が祈願された九十九王子のひとつ、切目五体王子社が見える。自転車はおろか乗り合い馬車すらない時代のこと。当時の人にとって徒歩30分は苦労でも何でもない。さらに南に歩けば、海がある。

ふるさと「切目村」は、繁一誕生1年前の1889（明治22）年に、島田村と西ノ地村が合併して発足した。「島田」は、切目村の中のおよそ東側に位置する集落を指し、その中の「楠本」はクスノキの古木に由来する。高さは20メートルを優に超えた。

その大樹のすぐ近くに、繁一の生家がある。現在の表記でいえば、和歌山県日高郡印南町島田95。家のすぐ前を県道197号が南北に通り、その県道の西側にある

生家の、さらに西側に切目川が流れている。この道が県道に昇格したのは1955（昭和30）年になってからで、以前は「（路線番号120）滝切目停車場線」と称した。日高郡の南部川村大字滝（現みなべ町）と切目村大字島田を結び、ふるさとの主要道であった。

とはいえ、その主要道も繁一が幼い頃は山と一体となったような、まだ「道」と呼べない地形で、それこそ人が通れる程度の「筋」しかなかった。当時、生活に密接した道といえば、むしろ楠本の集落の中を南北に通る「里道（りどう）」を、そう呼ぶことができる。里道を南に歩いた先には田んぼが広がり、そこを左に曲がれば後の県道となる道へ出る。右に曲がれば、田の真ん中を切ってわずかに盛土したあぜ道を歩くことになる。あぜ道を200メートルほど歩くと切目川に架かる楠本橋が見え、右は山側へ、左に歩けばぐるっと迂回しながら海へと通じる。

当時は、舗装もされていない土と石と草の細い荒れ道も、里道も、あぜ道も、子どもたちには有り難かった。ここを通って山にも海にも遊びに行けた。移動手段が

ない時代、もちろん大人たちにとっても欠かせない道であった。

切目村で生まれ、切目小学校に学び

繁一は、父林兵衛と母シユの次男として生まれた。長男である兄の重吉とは11歳離れている。先の山本幸子は重吉の実娘である。繁一には、ほかに5人の姉・妹がいたが、うち2人は幼い頃に亡くなった。この時代、早逝は珍しいことではなかった。

繁一誕生の翌年にあたる1891（明治24）年時点で、「島田」の人口は919人、戸数は188。西ノ地を合わせた切目村全体では、人口2,331人、戸数438との記録が残っている。

繁一は、里道を通り、あぜ道や川沿いの細い道を歩き、橋を渡り、切目王子の手

前にある切目小学校に通った。その距離は、現在の整備された道路で測れば約2・5キロメートル。当時の道を考えれば1時間ほどかかっただろうか。帰りの道中も長かった。「麦畑の中で泣かされたり、泣かしたり」と、繁一の4級下の男子が作文に思い出を綴っている。けんかをしたり、道草をしたりしながら、毎日を送った。

通学の道は、天気の良い日でも歩きやすいとはいえず、少しでも雨が降るとさらに苦労した。水田の多い土地柄だけに、道はすぐぬかるむ。学校に通う日は、男子



も着物に前掛けという姿である。あぜ道も着物も、すぐ泥だらけになった。切目川もあつという間に水かさが増した。1889（明治22）年の洪水をはじめ、多くの水害の記録が残る川である。ましてや護岸整備はおろか、川の「付け替え」すらしていない時代のこと、川に架けられた古い木の橋は通るに通れず、少し迂回して峠の下、切目川沿いの細い道を通った。その道も足元が悪いため、恐ろしくて行けない低学年もいる。大增水した時などは、年上の児童らに連れられ、中山王子近くまで行ってから近くの里道を歩いたり、周辺の家々の中を通らせてもらったりもした。通学も、子どもたちにとっては、それなりの覚悟を必要としたものであった。雪が降ったときや道が凍るような寒い日は、朝早く起きて上級の子どもの家に行き、学校まで連れて行ってもらったこともあった。

早く起きるのは、繁一は特に辛くはなかった。電気もない時代、油がもったいないからと子どもは早く寝た。学校の授業で疲れ、行き帰りと寄り道で疲れ、帰ってから次々とある家の仕事で疲れ、ぐっすりと寝た。

遊びは、鬼ごっこのようなものがあつたが、常には、川で水遊びをしたり、虫を取ったり、木の上に登ったりと自然を相手にした。学校では体操はいつも切目の浜でしていたが、浜も良い遊び場であつた。生家の近く、20メートル以上に高く茂るクスノキも日常の「遊具」で、工夫したり体を少し曲げたりすれば、木の上でも横になることができた。雪もよく降った。通学時は苦勞の種になったが、これも遊びの道具になったのは、現在も変わらない光景である。

繁一の小学校卒業と、兄重吉の渡米

1902（明治35）年3月、繁一は切目尋常小学校を卒業した。この1901（明治34）年度卒業生は51名で、うち男子18名、女子33名。同時期の全校児童数は251名を数える。

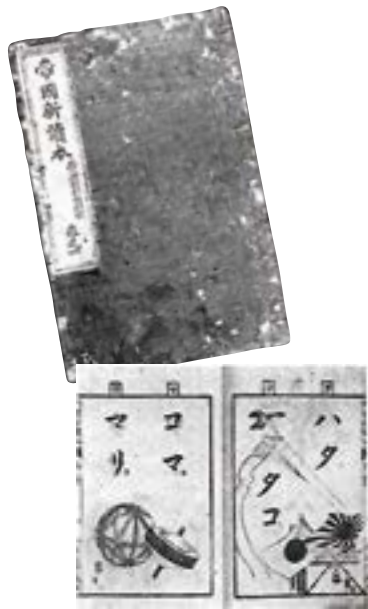
当時の同校における児童就学率は、94.95%と高い。1900（明治33）年の「学校令の改正」（第3次小学校令）で義務教育期間である尋常小学校の修業年限を4年に統一したが、これを機に大幅に伸びた。切目尋常小学校の児童就学率も、繁一卒業2年前の1899（明治32）年度は67%ほどにとどまっていた。

繁一は義務教育を終え小学校を卒業してからは、村の多くの児童がそうであるように、家の仕事を手伝う日々を過ごした。当時の切目村島田のうち「楠本」は14.15戸ほどの集落で、ほとんどが農業中心に生計を立てていた。ただ、特に肥えた土地とはいえず、他に収入の道を探る家長も少なかった。繁一の父、林兵衛もそんな一人であった。

林兵衛は、何代にもわたる山本の家を継いだ家長として働き者ではあったが、わき目もふらずコツコツと農作業に打ち込むタイプではなかった。「何かできることがないか」と、常に思いを巡らしているような気性で、商売っ気も人一倍強かった。酒も飲んだ。そのうち、港に近く人が集まるような場所を探して、酒屋を開い

た。まだ和歌山県内に鉄道が走っていない頃で、後に駅ができるような比較的にぎやかな場所ではあったが、素人の商売である。おいそれとはいかない。気がつけば借金が膨れあがっていた。やがて、先祖から受け継いだ田畑を売らざるを得なくなった。それを買戻そうと、兄の重吉は出稼ぎに出たまま——実は、繁一の小学校卒業時は、まさにそうした時期であった。

家に、兄はいない。わずかに残った田畑の作業や牛の世話、他にも何かと家の仕事をこなす「男手」の役割を繁一は担ったのである。



繁一が学んだ頃の小学校の教科書

「長男の責任から重吉が稼がないといけなくなったので、アメリカに渡って慣れない仕事をしたようです」。先の山本幸子は、父・重吉から聞いた昔話を覚えていた。

当時、出稼ぎに出るのはごく普通のこととて、その出先は大阪あたりが真っ先に考えられたが、一方では海外も選択肢となった。ふるさと和歌山の歴史には、北米移民に関する足跡が刻まれている。住民たちのアメリカやカナダへの関心は高かった。

1872（明治5）年、那賀郡池田村出身者が渡米し牧師となって帰国したのを機に村内で「北米熱」が高まり、1880（明治13）年には池田村の私塾の中に「渡米相談所」が生まれるまでになっている。1892（明治25）年にカナダに渡り、水産業で成功した日高郡出身者もいる。その後、カナダで財を成す和歌山出身者も多く出たものであった。

また1890年頃は、アメリカ国内で鉄道工事が盛んな頃で、その働き手を紹介・斡旋する商売も県内で始まっている。請負の会社も数社開設され、多くの県人の渡米を世話した。折しも1900年頃まではカリフォルニアの開拓途上期にあたり、紀南地方からの渡航者も増えていった。現地では、トマトやレタス等の農業、菊やバラなどの花卉栽培、また美術商や文具店など多様な仕事に就いている。まもなく、ロサンゼルス港の近くに、多くの和歌山県出身者と子孫が暮らす地域ができただけであった。かくして、「一旗上げるならアメリカへ」という道筋はついていた。

当時、ふるさとで流行った言葉がある。「連れも（つ）て、行こう」——和歌山弁で「一緒に行こう」との意味である。前向きの風がそこには吹いていた。

その風の中で、重吉も米国に渡ったのである。

長男はアメリカへ出稼ぎに行った。生家の男は、父林兵衛と次男の繁一の二人だけであった。

自分で生きる場所へ、めざすは北米か大阪か

田畑の仕事や他の家の仕事は、いつのまにか繁一が主体となっていた。父の林兵衛は商売の方に関心が高く、家にいる時間は多くはなかった。

繁一は不思議な気がした。「農家の次男というものは、家を継ぐ長男とは違って早いうちに家を出て、自分の仕事を探して自分で生活しないといけない」。当時、誰もがそうであったように、長男でない男の子は物心がついていく過程で、おのずとわかっていく。「いつ出るか、どこへ行くか」が、いわば関心事である。繁一も、小学校に上がる頃には漠然とそう理解していた。しかし、想像とは異なる毎日が過ぎていた。

兄の重吉は、繁一の小学校卒業後1年ほどたってから、稼いだ金をもって帰ってきた。「自分が家を出る時が、ついに来たか」——そう考えたのもつかの間、重吉はとんぼ返りしてまたアメリカへ。田畑を取り戻すには、継続して働かな

いととても追いつけなかった。

次に重吉が和歌山に戻ったのは、日露戦争のさなかの秋のこと。繁一が14歳になってすぐの1904（明治37）年11月であった。

これを機に、繁一は決心して家を出る話を両親に伝えた。中途半端な状態で家の仕事を続け、先がどうなるのか見えない毎日に終止符を打ちたかった。何よりも、同じような日をなんとなく過ごしている自分が許せず、自分で探した道で生きて見たかったのである。話を聞いた父は、「そうか」と一言つぶやき、意外なほどあっさりとした。母も反対はしなかった。「二人とも、自分の気持ちに気づいていた



繁一の兄 重吉20代の頃

のかもしれない」。繁一はあとで思った。兄からも、帰郷したその日のうちに承諾を取り付けた。

出ていくことは決まったものの、どこへ行くか、何をするかは決まっていない。選択肢は北米か大阪か、であった。北米なら、兄を頼ることもでき、県出身者も多い。ただ兄の重吉の話を聞くと、やはり異国で働くのは辛そうに思えた。

「アメリカの地名は覚えていませんが、父からは『異国の寂しい町外れで、毎日、寒さと闘いながら踏切番をした』と聞いたことがあります。『真っ暗な夜も、誰もいないところで、踏切を手で上げたり下げたり操作していた』と。その時、持って行ったトランクはいまも残っています」。山本幸子の回顧である。

繁一も、その状況を重吉から直接聞かされていた。そして何よりも、やはり兄と同じ道をたどるのは本意ではなかった。「自分で探す、自分で工夫して生きる」。これをずっと考えていた。

行先は大阪に決めた。

2

大阪へ、 野望と志を胸に

海を渡る

山で、海で、川で、クスノキで遊んだ思い出を置いて、繁一はふるさと和歌山を離れる決心をした。明けて1905（明治38）年、海路、大阪へと向かった。

当時、陸路はまだ整備されていなかった。

日本初の公営電気鉄道として大阪市電が開業し、花園橋（現在の西区 九条新道交叉点）と築港栈橋（現在の港区 大阪港天保山）の間を走ったのが1903（明治36）年。折しも同年、南海鉄道が阪堺鉄道の事業を譲り受け難波と和歌山市間が全

線開通している。しかし切目の者からすれば、和歌山まで出る足がない。国鉄（現JR）の線路敷設については、地元の要望が高かった紀勢線の鉄道建設案が国会を通過したのが1919（大正8）年のことで、翌1920年によりやく着工の運びとなる。切目駅の開業を見るのは、1931（昭和6）年まで待たなければならなかった。

人力で陸路を行こうとすれば、「歩くこと」。これが当時のふるさとの常識である。明治期に入ってから出現した人力車、馬車、牛車も移動手段とはいえない。ちなみに人力車は、1908（明治41）年でも日高郡全体で131台しかなかった。

さらに日高郡における自転車の歴史を探せば、明治30年代に県会議員が各地を遊説するために使ったのが最初と『印南町史』が伝える。当時の自転車はすこぶる貴重品で、「現在の自家用飛行機ほど高価な乗り物」であったという。

切目村の人間は、陸路は考えすらしなかった。大阪でもアメリカでも「遠方に行くなら船」であった。

繁一は船に乗って大阪に着いた。生まれて初めての都会である。

大阪のまち、明かり、電車

大阪は、人が多かった。まちは夜でも明るかった。ガス灯が1871（明治4）年に造幣局周辺からともされ、道もうつすらと明るかった。



本誌の基礎資料となった『印南町史』と『続日高郡誌』

明治期後半の明かりといえば、切目村ではろうそくや行灯（あんどん）、またランプで生活をする家がほとんどである。ただ、石油ランプは高価なため裕福な家庭しかなじみがない代物で、菜種油は一般的に収穫地は別にして石油の2倍ほどに高かった。電気についてはもっと後で、切目小学校出身の繁一の後輩が次のように回顧して作文に書いている。「大正元年、村に電灯が灯るようになり、ランプの掃除や灯油の補充などの仕事をしなくて済むようになった」。この家は、裕福の部類に入る。

大阪のまちの明かりは、繁一に切目村の生活を思い出させた。

そして繁一を驚かせたのが、路面を通る市電であった。車体は「ため色」という皇室の馬車等で使用したあずき色に近い赤系の色で、遠くからでも目につく。「花園橋西詰」から、1903（明治36）年7月に開港したばかりの大阪港にあたる「築港栈橋」まで、10駅・約5・1キロメートルを走った。大阪港は全国で初めて市自身が建設・運営する港で、終点の駅名に加え市電第一期線を「築港線」と名付

けたことから、大阪市の力の入れようが垣間見える。

さらに繁一を驚かせたのが、2階付き電車である。1904（明治37）年夏からお目見えし、市民からは築港大栈橋（現在の中央突堤）で夕涼みや釣りが楽しめる格好の電車として親しまれ、「納涼電車」「魚釣り電車」の愛称で呼ばれた。運転台には釣り竿入れも取り付けられたという。大阪市初の市電の起点となった花園橋周辺も活気があった。

ただ、当時の港区はまだ開発途上で、途中の景色は芦の茂る湿地や沼地が多い。市電開業前の周辺一帯はほとんどが近世以降に開発された新田で、その真ん中に築港に通じる築港大道路（現在のみなと通り）が造られ、さらにその中央に線路が敷かれて日本初の公営による電車、大阪市電が開通した、という経緯があった。「わしらが小さい時分は、特に何ということもない場所だった」——たまたま仕事の休みに行って歩いた築港大栈橋付近で、繁一は、そんな話を釣り人から聞かされた。

さらに男は、「『梅田すてんしょ』と呼ばれ瞬く間に有名になった大阪駅の周辺

も、昔は田畑や池や沼、荒地が多い寂しい場所だった」と、言葉が続ける。その曾根崎村が、1897（明治30）年に大阪市へ編入され大阪市北区大字曾根崎になった、と。

「どこも昔は田舎だった。初めから、都会ではなかった。一人前ではなかった」。繁一は、自分の姿に重ね合わせるようにつぶやいた。

「次の休みには、大阪駅を見に行こうか」。繁一は、そう思った。

荘保商店で働く

1905（明治38）年春から、繁一は大阪市内の金物問屋「荘保商店」で奉公していた。勤めることができたきっかけは、父林兵衛の酒屋である。

「繁一は、大阪に出たいと願っている」。そう強く感じていた林兵衛は酒屋に来

る客を観察し、ひとりの信用できそうな人物を見つけた。目をつけたのは、大阪で商いをしていて時々生まれ故郷に帰ってくるという中年の男である。男は、林兵衛とは気が合うように感じたからこそ、何度か訪れる客となっていた。林兵衛が故郷を問うと、低めの声で一言、「切目川村」と答えた。

「切目川村」は、切目村の隣村である。やはり日高郡の切目川中流域にあり、切目村より北東つまり山の方に入ったあたりに位置する。村が発足したのは、切目村と同じ1889（明治22）年。この店で二人が出会ってから半世紀と少し後、



切目川からも近い中山王子付近の道

1956（昭和31）年に二つの村は合併することになるが、そんなことは知る由もないままに、林兵衛は話しを切り出した。

「口数は多くないが真面目で、村の大人たちからも良い息子だといわれている」。だから、働き口を紹介してやってほしい。そんな風な理屈である。男は、最初にその話を聞いたときは黙ってやり過ぎしたが、次に店に行った時も、その次も、林兵衛はいつもと同じセリフでしつこく頼んだ。

男は、懷から封筒のようなものを取り出し、黙ったまま林兵衛に渡した。「故郷のあの酒屋に行きたいが、また同じことを頼まれるにちがいない」。そう考え、和歌山に来る前に手紙を用意していたのである。これを持って大阪の商店を訪ねろ、という。すぐに礼を言って林兵衛は受け取った。紙に印判を押したような朱色が見えたが、中を開けないまま繁一に渡した。

——どんないきさつがあったか知る由もなく、聞くこともできないまま、繁一は手紙を大事に懷に入れて村を出た。そして大阪に着いてすぐ、人に聞いては歩き、

歩いては聞き、ようやく大阪市南部にある莊保商店にたどり着いたのである。店に入って、忙しそうに動き回るひとりの大人を捕まえ、手紙を見せた。話は早かった。その日から、繁一の奉公が始まった。

故郷の酒屋に來た客の素性は、その後もわかっていない。この店の主人だったのか、取引先の大店（おおだな）か、繁一が築港で出会った釣り人なのか。何もわかっていない。

商売への尽きない想い

休みが取れたら大阪駅見物に——。そんなことも時折考えながら、繁一は仕事と向き合っていた。休みの日が待ち遠しい、という意識は特にない。毎日が新しいことだらけで、覚えることばかりで、そのこと自体が楽しかった。

店は金物問屋という商売だが、まず「商い」というものに興味があった。父が好み、楽しげに続けている商売というものがどんなものか、やってみたい気持ちが大阪に向かわせたのかもしれない。

仕事は、わからないことばかりなので、最初は先輩の言いつけどおりに動くしかない。動き回る繁一の背丈はというと、5尺5寸を優に超える。今でいえば170センチほど。成人男子の平均身長が、160センチ前後とされる時代。かなり大柄で、目立つ。15歳でもそこそこ堂々として見えた。体も丈夫そうだと周りも勝手に解釈し、どんどん用事を言いつける。少し難しいと思える仕事であっても、躊躇せずに行かせた。店は忙しかった。そのうち、「あいつに任せておけば何とかなるだろう」という空気が生まれてくる。「商売」への尽きない興味が、仕事を覚えるスピードを早めた。

中でも、営業の仕事が繁一は気に入っていた。仕事は問屋である。単純にいえば、仕入れてきたものがどれだけの値で売れるか、その差額が儲けになる。このこ

とが楽しかった。いわゆる差額は、ほぼ前例や類例に左右されて決まるが、最後は頭で決める。自分の知識や経験、勘や才覚が決める。儲けの数字もすぐに見える。父と同じように商いの面白さを感じたのかもしれない、と思った。普段、決して口数が多い繁一だったが、仕事中は違った。相手が何を考えているかが不思議とわかるようになり、要望を聞くより先に方策や提案を話し始めることもよくあった。「性に合う」。この仕事を繁一はそう感じた。



繁一 18歳の頃

「アルミニウム」という貴金属——その1

明治期前半、貴金属は別にして商売上よく扱われる金属といえば、銅、真鍮、鉛、錫等々があげられ、アルミニウムは一般にはほとんど知られていなかった。

日本におけるアルミニウムの歴史は、1887（明治20）年ごろに少量の地金が輸入されたのを端緒とする。当時のアルミ地金を扱った経験のある業界のひとり、**「貴重品として、普段は金庫に入れ必要な時に出した」という。まさに貴金属であった。アルミを使用した日本初の製品は軍隊用の帯剣・剣吊等の尾錠（びじょう）で、大阪城内に創設された官営兵器製造工場「大阪砲兵工廠（こうしょう）」の製造による。**

砲兵工廠は、当初は大阪城公園の北東の一角にあり、その後、日露戦争期の拡張などを経て明治末年には大阪城東側全域まで施設を広げていく。最大時は、南は現在の阪神高速13号まで、北は第2寝屋川を越え大阪ビジネスパークの北端あたりま

でに及び、敷地面積は約40万坪とも伝えられる。拡張の経緯と並行して生産技術も向上し、民間工業に大いに影響を与えていくこととなる。国内諸産業の発達における、ひとつの原動力でもあった。

アルミ産業史においても例外ではない。

「大阪砲兵工廠で1894（明治27）年にアルミ地金を溶解して尾錠をつくり、1897年にはドイツから買い入れた圧搾機を使って、水筒や飯盒が大阪砲兵工廠で試作された」と、国内アルミ業界先駆者たちの座談会が当時の推移を表現する。1898（明治31）年には住友伸銅場（のちの住友電工）がアルミ板を製造し、それを大阪砲兵工廠で軍隊用の皿、火薬の入れ物や蓋などに加工するという流れも生まれていた。

蓋はひっくり返すと、すき焼き鍋のような形になる。「これは家庭でも使える」と、砲兵工廠の払い下げ品を商売にする事業者たちは、新しい商品のアイデアを広げる。そうして民間産業史のページも開かれていくこととなる。

ただ、当時のアルミは極めて希少な金属で値も高く、1897（明治30）年頃で1匁1円、といった記述が業界先駆企業の社史に残る。1匁は3・75グラム。グラム換算すると26銭ほどになる。業者間の取引状況や力関係などで変わってくるため単純比較は難しいが、参考までに同時期の「銀」は造幣局資料（市価）で1グラム4銭ほど。東京の木村屋のあんパンが1銭、白米10キロが約1円、巡査の初任給（月給）が8〜9円という時代のことである。

1901（明治34）年頃からは民間でも地金が入るようになり、鍋や釜のほか、3寸5分から4寸（10から12センチ）ほどの大小の皿や茶碗といった食器もつくられた。「アルミ器物は売れる」と着目し、大阪砲兵工廠を退職して製造販売業を始める者も出てきた。

その後、かんざしや根掛けといった髪飾り製品もつくられ、小間物製品を扱う商売も現われた。まだまだ高価なアルミであったが、「紙だか金だか分らぬような金属で将来面白い」と、期待を込めて商売を始める者も出てきた。親しみを込めて

「軽銀」と呼ぶ者もいた。いずれも、先見性に優れた業界の先駆者たちといえる。

こうした国内アルミニウム産業の黎明期は、折しも山本繁一が切目尋常小学校を卒業した頃と重なり合う。



寝屋川近くに広がる大阪砲兵工廠

3

次の夢へ、 新しい金属とともに

生え抜きの金物屋、器物製造屋へ

奉公が始まってから2年以上がたった。

17歳を過ぎた繁一は、どんな仕事も嫌がることなくこなしていった。一人の男として早く生活できるようになりたいという想いが人一倍強かったし、それ以上に、仕事を身に着けていく何とも言えない感覚が好きであった。吸収するのも早かった。値段や取引先の顔を覚えるのは得意な方だと、自分でも思った。十分とはいえないが、取引先や仕入れ先と渡り合えるだけの知識や、仕事の呼吸のようなものを身につけてきたという自負も芽生えていた。

背もさらに伸びた。1年ほど前から眼鏡もかけるようになった。営業関係の書類も多く見るし、金属の勉強も続けた。近頃よく耳にする「軽銀」についても、意識して知ろうと努めた。

黒岩清治から「あらためて話がある」と声をかけられたのは、そんな頃である。

黒岩は、国内におけるアルミ器物製造工場の草分けのひとつ「池田アルミニウム器具製造所」に勤務していた。勤め始めたのは、繁一が荘保商店に世話になり始めたのと同じ1905（明治38）年頃のこと、歳は繁一より一つか二つ年上のはずである。はず、というのは、池田アルミは荘保商店と継続して取引があり、二人は仕事を通じて何度も話を交わし、そんな話も出た記憶があった。

黒岩は半年ほど前、繁一と初めて会った時から自社に引き入れたいと考えていた。若いのに仕事をよく知り、よくこなす。口数は多くないが相手の話をよく聞き、よく理解する。最近では眼鏡をかけ、ふとした時に学者のような雰囲気すら感じるところも気に入っていた。

実は繁一も、新しい金属「軽銀」には大いに興味をもち、池田アルミへの誘いを魅力に感じていた。しかし、恩義があった。まだ子どもだった田舎者を雇い、成長させてくれたこの会社には大きな恩がある。自分の気持ちに蓋をするように、黒岩の話を断った形で時間が推移していた。

黒岩は再度、池田アルミ入りを勧めた。同社の創業者が、樟脳の製造販売から身を起こしたこと、樟脳が政府の専売となって仕事ができなくなったこと、そして可能性に満ちた軽金属の世界に大きく舵を切ったことなど、会社の歴史についても話した。黒岩は、池田アルミの経営陣とは親戚筋にあたる。

繁一の心は動いた。アルミの可能性には以前から魅かれていたが、それにも増して、初めて聞いた「樟脳」に縁を感じたのである。かつて、生家の近くにあったクスの大樹。クスは「樟」とも書く。「この木から、樟脳を取る」と、誰だったか、いつの頃だったか、そんな話を聞いた記憶がよみがえった。フツと、目の前にふるさとの景色が広がった。池田アルミという会社が、急に近しいものに感じられた。

庄保商店の責任者に礼を尽くし、繁一は退職を願い出た。18歳になる少し前、1908（明治41）年の夏が終わる頃である。



楠本の地名の由来となった「大クス」も
平成の時代に切られた

「アルミニウム」という貴金属——その2

今日のアルミニウムの用途を見ると、輸送、建設、容器包装が3大分野とされ、他にも「暮らしのあらゆる分野」といえるほど実に多岐にわたっているが、明治期後半は、ごく限られた分野でしか使用されていなかった。前述の家庭用品や、耳かき、かんざし、串、猪口、鉛管といった小物の類である。

軽くて加工しやすいという特性が向かわせた成果でもあるが、「小物」の言葉どおり、材料が少なく済むことも理由となる。銀よりも値が高い。つまりは、国内におけるアルミニウム量自体が少ないゆえの対応でもあった。

明治期後半以降のアルミニウム地金輸入高（単位英トン）を次に示す。

1903 (明治36)	107
1904	389
1905	145

（日露戦争始まる）
（繁一が荘保商店に奉公）

1906	196
1907 (明治40)	826
1908	430
1909	384
1910	459
1911	429
1912	971

（繁一が池田アルミに入所）
（明治天皇崩御、時代は大正へ）
単位英トン

なお、輸入地金が使用された分野やその割合等については、残念ながらデータは見つからない。わずかに器物については、業界社史の類に次のような記録がある。

「日本におけるアルミニウム器物の製作が関東関西とも陸軍の砲兵工廠を母体として発展したことは周知の事実であるが、市場に現れた器物としては、スキ鍋、弁当箱が古く、続いて鍋類、杓子（しゃくし）、皿、後には飯盒が出た。湯沸は勿論手打ちのもので、鍋類も鋳物製のものが相当出ていた」（原文ママ）池田アルミの歩みを綴った『稲田 實之助 榎之助 兄弟』より）

また当時は、製鋼所や製鉄所の脱酸材としてアルミを使っていたと考えられるが、その量などは定かではない。

池田アルミは梁山泊に似て

池田アルミニウム器具製造所は、国内アルミ産業の先駆企業のひとつに数えられる。

1901年（明治34）年10月に、播州揖保郡（現在の兵庫県姫路市）出身の池田沢蔵が大阪で樟腦の製造販売業を営み、その後、軽金属の事業に転向した。本社・工場の所在地は、大阪市南区難波稻荷町（1925Ⅱ大正14年から浪速区稻荷町）。西と北は桜川に、東は湊町と接し、現在もなにわ筋沿いにある稻荷交差点付近が、南の端にあたる。

業種は、「製造所」の名のとおり物をつくる会社である。問屋とは違ったしんどさがあり、面白さもある。自らが、材料をうまく手当し、儲けが出るよう商品をつくる。適切な数量をはじき出し、適切な相手に売る。売るタイミングも見極める。それらはすべて、地金問屋の営業で身を立ってきた繁一の日常でもあった。また「アルミニウム器具」といいつつ銅や真鍮などを手掛けることも、望むところであつた。経験が一つ残さず生かせる仕事に就いた。そう繁一は感じた。

当時の所員は、工場の働き手以外で残っている記録は少ないが、所長の池田沢蔵



繁一 19から20歳(と思われる)頃

以外では、技術者として勤務期間も長い宮本、金物商の経験がある黒岩、他には稲田槇之助が繁一の約1年後に入所する。のちの大阪アルミニウム製作所の社長である。さらに、その2年後に槇之助の実兄實之助ら数人が加わる。

池田沢蔵は實之助・槇之助とは従兄弟の間柄で、槇之助には中学校卒業直後に「仕事を手伝ってほしい」と声をかけた。さらに「これから必ず伸びる仕事やからな」と続けたという。まだ海のものとも山のものとも知れない事業を、こう表現した。期待を込めたのは間違いないが、先見性があつたといえよう。同じく親戚筋にあたる黒岩も同様に誘っている。

また1911（明治44）年には、槇之助の兄實之助も入所する。これは池田沢蔵が42歳にして他界し、会社を後継する立場で支配人として加わったものであるが、当時まだ26歳の若さであつた。

入所当時の業界の姿を、實之助は『軽金属年間（昭和12年）』で次のように振り返っている。「国内におけるアルミニウムの製造工場は5つしかありませんでし

た。運用資本もわずか50万円程度、消費アルミニウム塊は500トン未満でありました」。この500トン未満というのが、実数の統計値か、前述データ（1911年アルミニウム地金輸入高429トン）から来ているのかは定かでない。

かくして10年目を迎えた池田アルミは、若者たちが経営を先導する会社として業界でも知られる存在となった。舵取役の稲田實之助が26歳、黒岩もほぼ同年齢、槇之助22歳、そして山本繁一21歳。事業の中枢を担う顔ぶれである。アルミニウムという新しい事業とともに開いていこうと前を向き続けたのは、いずれも二十歳（はたち）代の青年であつた。

それぞれの夢や野心は異なるかもしれないが、池田アルミという「梁山泊」に集った仲間たち。ここを根拠とし、次の一步へと向かうための切磋琢磨の日々が続いた。

青島にて、「銭流し」と「アンコロ」

池田アルミニウム器具製造所は、若者たちがいずれ羽ばたいていくための実学の場でもあった。その中心となるのが各種アルミ製品であるのは言うまでもないが、それでも、まだまだアルミだけで「飯が食えた」時代ではない。銅、真鍮の細工や小物に加え、当時高く売れた亜鉛も積極的に扱い、収入の道とした。

黒岩や繁一が、たびたび中国の青島に足を運んだのもそんな理由からである。

青島は、小さな港町であったが日清戦争前ごろから軍事施設がつくられ、まちの発展を促している。軍事関係施設が充実していく過程で、自ずと周辺商業も成長していくというのは大阪砲兵工廠のケースでも確認済みで、類例は枚挙にいとまがない。青島はその後、1898（明治31）年に日清戦争後の三国干渉当事国のひとつドイツの租界地となり、ドイツ風建築物が次々に生まれていくとともに、港や上下水道の建設といった都市整備が行われている。青島ビールもまた、ドイツ統治下

の1903（明治36）年に誕生した。

東洋と西洋の雰囲気混在するこの地に、繁一は一厘銭を買い集めるために訪れたのである。集めた厘銭は日本に持ち帰って熔かす。「銭流し」と呼ばれた加工である。当時、中国で発行されていた一厘銭貨を亜鉛と銅に吹き分けて売ろうというのが出張の趣旨で、亜鉛は高値で取引できた。現地の厘銭は亜鉛の含有率が高かった。この頃、金属で商売しようとする者にとって、銭流しは特に珍しいことでもなかった。



その後、現地政府が貨幣輸出禁止令を出すと、池田アルミは現地に熔解工場をつくって対応した。といっても、一厘銭を熔解してしまうのではなく、熔解した銅で一厘銭を包んだようなインゴットをつくり、これを日本に輸出するのである。銅という「皮」をはぐと、一厘銭という「アンコ」が出てくる。この手法を、往時の業界を知るものは、あんパンならぬ「アンコロ」と呼んだという。「こんな簡単なことで結構輸出許可になったらいい。当時、ほうばうの工場で行っていたようである」と、池田アルミニウムの歩みを記す稲田兄弟の冊子に書かれている。

100年も前の話である。「もう時効」といえるのかどうか、判らない。

明治から大正へ、新世界と楽天地

稲田實之助が池田アルミの支配人になって1年後、時代は明治から大正へ。その

境目にあたる1912（明治45）年は、年明けから7か月間を経た7月30日に「大正」の世に移る。

明治最末期といえる同年7月3日、大阪市の新世界に通天閣が完成した。パリの凱旋門にエッフェル塔の上半分を乗せたような姿で、高さは約75メートル。建設費が当時で約9万7000円、当初の入場料は10銭と伝えられる。同日、「新世界ルナパーク」も開園した。アメリカの遊園地を模した大規模な遊園地で、メリーゴーランドや絶叫マシーンもある。通天閣と4人乗りロープウェイで結ぶ斬新な設計も、人気を集めた。周辺には演芸や興行館、飲食店や旅館などもつくられ、まさに一大娯楽ゾーンである。夜にはネオンが瞬く不夜城の趣となり、これも人びとの度肝を抜いた。

繁一は、休みの日にここに来たことがあった。まさに別世界であった。家族にも見せたいと思った。兄の重吉は、多分アメリカでもっとハイカラな景色を見ているに違いない。このルナパークも、アメリカの遊園地を真似してつくったものと聞い

ている。「だから、父と母に見せてやりたい」と。父はまだ酒屋をやっているのか、はつきりとわからなかった。いつだったか一度だけ、ふるさとに帰ったことがあったが、父は酒屋の話はしたがらなかった。

大阪は、大正期に入ってからハイカラな娯楽の地を生みだしている。

その名も「楽天地」。1912（明治45）年1月の「ミナミの大火」で難波新地周辺の約5千戸が焼失したことから、繁華街の灯を消すまいと1914（大正3）年5月に建設されたレジャーセンターである。

焼け跡に、現在の千日前通にあたる東西の通りが拡張されて電車通りが生まれ、新しくできた千日前交差点の南西角に、一大娯楽センターが出現した。館内には芝居・演劇・映画の大小劇場があり、“外国映画”も上映された。約300人が収容できる小劇場では、後の銀幕のスター田中絹代や駆け出し時代の花菱アチャコも舞台に立った。メリーゴーランド、ローラースケート場、水族館などに加え、大阪市内が見渡せる展望台も人気を集めた。

新世界も楽天地も、池田アルミからは遠くない。当時は、おおざっぱに言えば産業も文化も大阪の南部あるいは南西部から栄えていた頃で、交通の発達もしかりである。池田アルミをはじめ南区あたりの勤め人は、それを享受しやすい環境にあったといえる。

すでに明治時代のうちに大阪の市電は、東西線（九条中通一丁目―末吉橋）、南北線本線（梅田停車場前―恵美須町）、南北線支線（大江橋―渡辺橋、梅田停車場前―大江橋）、九条中之島線（花園橋西詰―渡辺橋南詰間）を開業した。明治期末



「ミナミの大火」跡にできた楽天地

の1912年1月には、市電料金も従来の区間制から4銭の均一制に改定。乗換券の発券も開始され、より利用しやすくなった。
ちなみに宝塚少女歌劇の初公演は1914（大正3）年、大阪市立天王寺動物園の開業は1915年のことである。

4

揺れ動いた大正初期、 独立を模索

「欧州大戦」と大正の天祐

経済も文化も娯楽も、大阪が文字どおり新世界の扉を開いていた頃は、日本の、そして世界の歴史が従来の歩調を超える速度で動き出した時代でもあった。

最たるものが、1914（大正3）年7月に勃発した第一次世界大戦である。1905年に日露戦争が終結して以来、国内景気は沈みがちであったが、それが上向きに転じる要因となった。この戦争は当時、国内では「欧州戦争」あるいは「欧州大戦」と呼ぶ人が少なくなかった。多くの日本人にとって、はるか遠い地での出

来事という面持ちである。自分たちの暮らしには、さしたる影響がない。そんな心理を表わしていた。

恩恵も大いに受けた。開戦当時こそ貿易の途絶により混乱をきたしたが、翌1915（大正4）年後半に入り「大戦景気」あるいは「大正の天祐」とよばれる好況の風が吹き始める。英・仏・露・伊などの連合国に物資を供給する能力がある国は、当初は戦争の圏外にあったアメリカ（1917年4月参戦）を除けば日本しかなかった。造船、製鉄など軍需関係を中心に、鉄道、電気、さらに民需全般で国内産業は旺盛となった。設備投資の増加は、建築業界でも空前のブームをおこした。大阪では、開戦以降ドイツから輸入できなくなった薬品が天井知らずの値をつけ、道修町界隈で「薬成金」が次々に生まれたという話が伝えられ、「大正の天祐」の実情を垣間見せる。さまざまな業界で「にわか成金」が生まれた頃である。

景気が良くなれば物は売れる。アルミ製器物も、他の金属製品等も例外ではない。池田アルミも1915年後半からは多忙な日を過ごすことになっていくが

……、実はその前の1915年1月から、生まれて初めてという忙しさが繁一たちに降りかかることとなる。

発端は、年初に聞かされた軍用品の引き合いである。ロシア政府から、飯盒と水筒の製造依頼が、三井物産を通じて池田アルミに来ていた。現在のロシアとは異なる、いわゆる「帝政ロシア」（1721年～1917年）のほぼ末期のことである。

数量は水筒・飯盒合わせて150万個。しかも納期は3か月。実はそれまでも何



池田アルミ事務所前
手前の6人のうち左から2番目が繁一

社かに話を持ちかけたが、膨大な数量と非常識ともいえる納期を前に、国内に引き受ける会社はなかった。

外国軍用品の製造依頼を前に

合わせて150万個という数量は、まもなくロシア側の予算等の関係から縮小された。決定した製造量は、まず2か月間の納期で銅製飯盒30万個。続く3か月でアルミ製水筒50万個を収めるという内容である。

減少したとはいえ、あまりにも膨大な数量に池田アルミ関係者は、恐れにも似た感情すら抱いた。特にアルミは若い金属だけに、材料確保面の難しさは銅の比ではない。この取引に失敗すれば、会社の存続はなかった。社内でも受けるかどうか、意見が割れた。

繁一は、この取引の話が起こった当初からある程度の動きを察知していた。仕事は営業面が中心で、常に客先の動向を注視してきた自負がある。海外にも何度か出向き、中国大陸でも業界関連動向を見聞きする機会も多い。ロシア側が満州で製品見本を取って、それから日本に引き合いがあったという経緯も知るところであった。

もちろん、この取引が極めて難しいことも承知していた。経験したことのない数量、短い納期、満足とはいえない会社の製造設備、製造担当人員数、膨大な材料の確保……。不安要素を数えれば、きりがなかった。

「それでも、やりたい」。繁一は思った。「縁あって、自分が関わったこの若い金属を、この新しい産業の将来を、拓いていくための大きな節目になる。きっと歴史を変える岐路になる」。そんな感情が不安を押しつけた。「自分も、そうした岐路の中でひとかどの役目を担うことになる」という想いは、喜びに似た感情となつてふつつと沸き起こっていた。繁一は、会社上層の主だった者たちや支配人の稲

田實之助に仕事を受けるよう進言し、一方では材料の手当や取引先への協力依頼等を地道に進めていった。

實之助にも迷いはあった。困難は多く、会社壊滅の危険もある。しかし、これを作り遂げれば日本のアルミ工業に大きな光を灯すことになる。その使命を感じていた。断れば、この仕事が日本から去っていくことも想像できた。もちろん、会社のトップとして膨大な利益が得られることは大きな魅力であった。

實之助は受けた。30歳になる直前のこと。突き進む若さがあった。

この報に接し、池田アルミ関係者からは批判の声が続出した。当時の池田アルミは匿名組合組織になっており、その組合員、つまり親戚筋などから強硬な反対意見が届いてきたのである。「實之助は会社をつぶす気か」と。一般的に考えれば、数量や納期、生産能力等の諸条件から、そうした意見も的外れとはいえなかった。

それでも實之助は、皆の力を合わせれば実現できると信じた。いや、願ったのである。梁山泊に集ったかのような、若く頼りになる仲間たちが周りには存在した。

銅製飯盒＋アルミ製水筒Ⅱ注文80万個

まずは銅製飯盒30万個の製造に取りかかった。1915（大正4）年3月に着手し、4月中旬に20万個、5月20日までに残り10万個を納める。内側を錫で鍍金（めっき）する仕様で、ロシア側ではシチュー入れとして使うとのことであった。



池田アルミ工場内

当時、日本の「シチュー事情」は、まだ入り口を入った頃にすぎない。1871（明治4）年に東京・九段の洋食店の引き札（チラシ）で「シチウ（牛、鳥うまに）」と記載されたのが明確な記録のほぼ最初とされる。明治後半には軍隊食でもつくられ、主婦向け雑誌には「西洋料理」と並んで登場したが、同雑誌の読者はいわゆる上流階層のみ。まだ一般に普及した食べ物ではなかった。繁一を含め、池田アルミの社員がこのハイカラな食べ物を知っていたかどうか、同社の会社案内等にもやはり記載がない。

そのシチュー入れ、つまり飯盒の主材料である銅板は、1897（明治30）年創業の住友伸銅所（現住友金）製となる。大阪市西区の川口にある同社安治川工場から、必要量のすべてを購入できた。

川口といえば、先にもふれた大阪築港造に関連する大阪の先駆的な場所で、川筋には倉庫や工場などが進出していた。木津川対岸の江之子島にはドームのある洋風建築の大阪府庁舎が建ち、周辺一帯は大正期末まで大阪の行政の中心地でもあつ

た。洋食店や中華料理店、カフェもある文明開化の象徴的なまちとしても知られた。銅製飯盒30万個は、約束通りの期日に何とか完納した。

直後から、アルミ製水筒の製造に取りかかった。納期は3か月。6月に10万個、7月20万個、8月20万個の全50万個である。準備は、繁一ら経験豊富な若者たちが奔走し、取引の契約を終えるまでに策を立て、見通しをつけていた。

まずアルミ板の確保である。当時の池田アルミには圧延機がなく、ロールメーカーに頼む必要があつた。安治川の住友伸銅所は、この時期は銅板の製造をやめアルミ一本に絞って対応すると約束してくれた。しかしそれでも賄いきれず、同じく大阪市内にある日本アルミニウム製造所（現住友グループ）や東京の製造所にも依頼した。国内で実績のある各社が全面的に協力してくれることとなり、板の手当はめどがついた。

材料のアルミ地金については、アメリカから輸入する手はずをつけ大阪港に着き

次第、工場に運び込んだ。その工場といえば池田アルミにはかならないが、製造量が多すぎて稲荷町の工場だけでは追いつかない。近くの事業所の工場数か所を借り受け、そこに急増した設備を入れるという策を取った。

もうひとつ、頭を悩ませたのが「人」であった。当然、池田アルミの既存の従業員で足りるはずはなかった。

人集めの算段と独自の技術

「〇〇名入用、〇月〇日来社あれ」——1915（大正4）年の春から初夏に移ろうという頃、池田アルミの工場周辺に数枚の張り紙が出現した。繁一ら幹部連中や、工場の職長らで考えた人員募集作戦である。募集数は数百人レベル。この頃は欧州大戦の好景気が起こる少し前の不況といえる状況で、職に困っている人は少

なくなかった。

はたして当日の朝、早くから工場前に人があふれ長蛇の列をつくっていた。作戦成功である。とはいえ、健康診断はおろか試験や面接をやっているヒマはない。採用基準は「早い者勝ち」。工場の職長が、歩きながら列の先頭から人数を数え、適当なところで「ハイ、ここまで採用。後ろの人は帰ってくれ」と、後ろを向きながら大声で叫ぶ。数えるのもおぼざっぱで、その中から池田アルミの工場や、場所を借りた各工場に人員を配置する。足りなければ、再度募集した。

実は、この人員の大募集に先立って、繁一はふるさとの切目村に便りを出している。田舎は、大阪のまちほどには「不況だから」と急に職を失い生活が困るというものではないが、大阪で仕事がしたい、あるいは大阪で稼いで実家に仕送りしたい者がいるのではないか。そんな想いからであった。かつて自分も人の助けで大阪に来ることができたし、大阪から仕送りもしている。

では、その頃の切目村の姿はどうであったか。生計をどう立てていたのか。大正

初期から数期にわたり村長を務めた井上浅吉が『わが切目村』を作詞し、村のようすをざっと表している。——人口は2,700人、戸数475。第1章では、1891（明治24）年時点で人口2,331人、戸数438と先述したが、約25年を経てもさほど増えていない、歌詞には仕事の内訳もあり、「農家6分、漁戸1分、商工1分、他は諸業」と村長は分析している。

ふるさとへの手紙は父林兵衛宛とし、知人等に知らせてもらうことにした。募集が始まる少し前に来阪するよう書いておき、一方で会社にも話をつけ何人か雇ってもらった。

かくして、紀州からの助っ人も加え人員は揃った。稻荷町近辺の各工場で作業は進んでいった。

技術面の工夫も進捗を促した。池田アルミで早くから磨いてきた荒砂を詰めて压榨する「水筒砂押法」や、他に先駆けて導入した「ガスバーナー」等は、作業効率を大きく高めている。ガスバーナーは水筒の製作用に大阪ガスと共同したもので、

業界で従来、使用していたトーチランプと比べるとけた違いの能力を示したものであった。

その間、圧延を依頼した各社も協力を惜まず、ロールが焼けるほどのフル運転で応えてくれた。

- 三、紀伊水道を西南に へだててのぞむ四国島
海岸延長二里近く 断崖高浪岸をうつ
- 四、東西二十有余町 南北凡そ一里半
村の面積一方里 ひろからねども住民の
- 五、戸数は四百七十五 人口二千七百人
農家は六分に漁戸一分商工二分に他は庶業
- 六、田畑は二百と十余町 宅地は三万七千坪
山林原野の面積は 五百と二十有余町

大正期の切目村村長 井上浅吉がつくった
『わが切目村』歌詞の三～六番
〔鉄道唱歌〕の節回しで歌う

アルミ水筒50万個完納、次の岐路へ

製造が始まると、稲田兄弟も繁一も、他の幹部たちも工場に泊まることが増えた。朝から晩まで深夜まで、仕事を指揮し進捗を確認した。機械の横で寝ることもあり、目が覚めればすぐに作業。そんな日も少なくない。気候も良く、初夏から夏の暑い季節。ごろ寝もできなし、幹部たちはみな若い。無理はきいた。

一方で繁一は、折々に製品検査にやってくるロシア将校との折衝役も担っている。当時、三井物産大阪支店が保有する乗用車は1台のみで、ほぼ将校の送り迎え専用として使用されていた。揚々と車を降り会社に入ってくるその検査官と対峙し、繁一は一步も引かずに折衝した。幸いにも、「不良品」と告げられる数はいつも予想を下回った。数次にわたる検査は大きな問題もなく推移し、アルミ製水筒の生産は順調に進んでいった。

そして1915（大正4）年8月末、最後の20万個の納品日を無事に迎えること

ができた。ついに50万個を完納した。人と、技術と、協力してくれた諸企業の力、さらには、この仕事全般に関しては運もきつと味方してくれたに違いない。繁一はそう感じた。



池田アルミ事務所前で 右から2番目がロシア将校

業界が注視した大仕事は完遂した。多くの雇用を生み出すことにもつながった。繁一の呼びかけでふるさとからやってきた人たちも、アルミ業界にとって歴史的な事業の一端を担った。もちろん、それぞれが働きに見合う収入を得た。池田アルミの利益も大きかった。

この取引は、アルミ業界で後々まで伝えられる出来事となった。繁一にとっても、これまで培ってきた仕事の経験や自分の能力をすべて活かせたと思える機会となった。ただ、一方では、これまで自らに集積してきた実績、知見、技術や他の持てる力すべてを、一気に解き放ったような脱力感も感じた。過ぎるほどの充実感が原因かもしれない。仕事に力が入らない時期が少しの間、続いた。

半年ほどたって、繁一は退職を願い出た。あの「50万個」の時のような緊張感と充実感をもう一度、味わいたい。それには自らが矢面に立ち、自分ですべて決める状況をつくるしかない。そう感じたのである。

5

大正から昭和へ、 アルミ再生精練の道へ

前途の風雲を望み、混迷の中へ

一人で歩きだした繁一は、池田アルミ時代の人脈を生かしながら仕事の可能性を探っていたが、まもなく思い立って中国へわたった。始めたのは、金属材料類を主体とする日本向け物資を取り扱う仕事である。もちろん、これがやりたかった仕事ではない。後々のための準備の一段階であったが、思うようにはいかなかった。

かつて何度か訪れた青島にも行った。現地に着いてすぐ、あの「銭流し」を懐かしく思い実際にやっても見たが安定収入につながらず、何よりも事業と定めるだけ

の熱意が生まれなかった。その後2年ほど、雌伏の時を過ごす。大阪に戻ってから、充実感を得るにはほど遠い時間が過ぎた。

繋一が混迷の日々を過ごした頃は、世界も混迷と激動の時代であった。

「欧州大戦」は、1917（大正6）年から日本も欧州へ赴く戦況へと移り、国民にとっては以前より「世界大戦」を実感することとなった。大戦の影響が国内にも及んだ一例に、翌1918（大正7）年秋からスペイン風邪と呼ばれる流行性感冒が広がったことがあげられ、これも「道修町の薬成金」をいつそう潤す結果となっている。

しかし直後に大戦は終結、経済恐慌の状況が世界を覆う。日本でも船舶や鉄鋼業界の落ち込みは特に激しく、基幹産業ゆえに他業種にも不況の雲を押し広げていった。その中でアルミ業界は、産業自体が揺籃期を出たばかりであり企業数も少なかったことなどから、大した影響はなかった。

1918年といえば米騒動が起こった年でもあるが、当時の農村等の貧困を映す

出来事という以上に、その後の「デモクラシー」の一点としての意味を持つ。豪商らが米を買い占め投機の対象とするなど理不尽な状況に対し抗議の言動を高めた庶民が、そうした声や行動が国を動かし、生活を変える可能性を持っていることに気づいたのである。都市部では、大戦景気→急激な工業化→地方から人口流入→生活不安定→戦後不況→生活困窮、という流れがあり、これもその後に奔流となっていくデモクラシーの背景ともいえる。世間の動きに関心が高まり、それまで見なかった新聞の購読者が目に見えて増えた時代とも、ほぼ重なる。



1918年7月の米騒動を報じる新聞

なお「デモクラシー」は実際に当時流行した言葉で、一方「大正デモクラシー」の呼称は1954（昭和29）年の著書名に使われ広まったもの。普通選挙など、現在につながる民主の原型を表した言葉は時代の空気の特徴づけ、それに基づく政治・社会・文化が繰り広げられたのである。

兄重吉に頼み込んだ借金

1918（大正7）年は、繁一の成長に力を与えてくれた池田アルミが姿を変えた年でもある。その経営主体が創業家である池田家に戻され、経営を担っていた稲田實之助と弟の槇之助は同社を離れ大阪アルミニウム製作所を設立した。一度、繁一と前後して池田アルミを離れていた黒岩も、稲田兄弟の新会社にあらためて参画した。

その頃、繁一は大阪にいた。新しく始める事業の姿はまだ確たるものにならず、雌伏の時が続いていた。金銭も乏しかった。池田アルミ時代には相応の収入を得ていたが、ふるさとへの仕送りも続けていたため懐は当時からさほど余裕がなく、それでも事業を始める程度の資金だけは残していた。その蓄えも、国内外で事業を模索する中で底を突いた。

繁一は、個人経営の金融業者から高利の金を借り、新たな商売を開始した。荘保商店時代から経験のあった金属小物や各種商品等を扱い、問屋とも仕事のやりとりをする仲買業である。やはり大阪市内の賑わいのある場所がよいかと、西区南堀江2丁目に住居兼事務所を構えた。事業はまずまず順調に推移した。しかし、第一次世界大戦が収束する頃から景気は下り気味となり、市民の購買力低下と合わせ商品の動きも鈍っていく。その後、商売を立て直そうと試みたが、借金が増えるのみであった。

繁一は、「金を用立ててほしい」とアメリカにいる兄の重吉に手紙を書いた。高

利貸しへの返済期限は目の前であった。

1921（大正10）年冬、大阪港近くの旅館で久々に兄重吉と会った。兄とは、大阪に来て奉公を始めて以来、一度、切目村に帰った折に会ったが、その時はアメリカに戻る時間が迫っているからと、すれ違うような小一時間だけの再会。1914（大正3）年に母のシュが亡くなった時も同様であった。だからといって、今回もゆつくりはできなかった。実は、アメリカで稼いだ金をもって帰国したばかりの兄と待ち合わせたこの旅館も、借金取りから「そこで待っている」と指定された場所。懐かしさに浸る余裕などなかった。兄は結局、弟に金を融通したため、ふるさとに帰らずそのままアメリカに引き返すことになったのであった。

借金は返済できた。兄にも、その金を待っていた家族にも、ただただ申し訳なかった。どんな事業をやるにせよ、もう失敗はできなかった。

アルミニウム再生精練業に着手

1922（大正11）年の春、繁一は事務所を閉鎖し事業の一切を清算整理した。少しの金が手元に残った。そして兄から借りた金で借金を返済したが、その残りもわずかにあった。この手持ち資金を、何が何でも活かさないとはいけない――。

まもなく繁一は新事業の道を定めた。アルミ器物は製造の段階で溶解滓や灰、また不要くずなどが生じるが、これを利用しアルミ再生精練の事業を展開しようと決



繁一 30歳前後(と思われる)頃

めたのである。

大阪に出て来て以来、金属問屋や器物メーカーで働き、ひとかどの経験と実績を積んできた自負があった。縁あって出会ったアルミは、この頃もまだ社会に浸透した金属とはいえなかったが、かつて砲兵工廠でアルミ器物が製造されてから4半世紀ほどがたつ。軽さや使いやすさは、飯盒等を戦地で使用した帰還将校や兵隊たちからも少しずつ広がっている。一般家庭に定着する時代も近づいてきたのではない。そんな手応えと期待があった。だからこそ、アルミ器物の製造ではなく、その材料となる地金を再生精練して製造する仕事、もっと大きな可能性を秘めている。そう確信した。

同年11月23日——32歳になったばかりの繁一は新事業を開始した。今日の社業に直結する「創業の日」である。

一步目を記した場所は、「西成区」になる前の「西成郡」の一角で、1925（大正14）年の大阪市第二次市域拡張の際に編入され大阪市西成区長橋通と称し

た。当時の西成郡は、玉出や天下茶屋に集落があったほかは農村が広がる地域で、大正期以降に大阪の中心部から近いこともあり宅地化が進んだ所である。

小さな工場を借り受け、繁一はアルミ再生塊の製造を始めた。工場とは名ばかりで、男2、3人が押せばすぐつぶれそうな小さな建屋にすぎない。設備といっても、小さな坩堝（かんか）炉1基と銅搗（スタンプミル）3本のみ。もちろん従業員を雇うこともできず、原料集め、熔解や地金の製造、その売り込みなど、すべて一人でまかなう。毎朝5時に工場に入り、深夜2時に帰宅するのが日課となった。

一人で始めた仕事は少しずつ回り出した。かつての人脈が生きたとともに、業界での経験が豊富でありながらも実直な繁一の気質が仕事を広げた。常に相手の意見をよく聞き、よく理解する人となりは、若い頃と変わることがなかった。

1923（大正12）年、関東大震災が起こり大正期の歴史はさらに激動の色を深める。それに関する繁一の動向記録は残っていないが、翌1924（大正13）年に合資会社を設立するなど事業は好調に推移した。

人も増えた。和歌山の切目村から親類や知人、その家族や知人・子弟などを雇い入れ、仕事を覚えさせた。大阪で仕事をしながらも、ふるさとへの想いは常に繁一の意識の中にあり続けた。

繁一を育んだ「大阪」と「紀州」を名に

1924（大正13）年に興した会社は「合資会社大紀アルミニウム工業所」と名をつけた。大阪の「大」と、ふるさと紀州和歌山の「紀」である。「もし自分の会社をつくることができれば、この二文字を入れたい」。ずっと考えていたことを、繁一は34歳になって実現した。

会社発足に合わせて場所も移転し、大阪市浪速区馬淵町に工場と事務所を開設した。当時は南区の一角で、1925（大正14）年の大阪市第2次市域拡張による新

設区である。



昭和10年代の広告と社員たち 中央に繁一



ちなみに同年の区別人口を見れば、最多が港区の28万1千人、当時、発展する大阪市の先頭を走ってきたことが顕著に表れている。次いで東成区23万6千人、3位が北区20万人。浪速区は南区より2万8千人多い14万9千人が住んだ。大阪市（全13区）人口が211万人を超え、人口日本一の「大大阪」とよばれた時代であった。急激な人口増の要因としては、市域拡張に加え、1923（大正12）年の関東大震災による被災者等の関西転居があげられる。

かくして繁一の会社は、資本金1万円の事業所としてまた新たな一步を刻んできた。職人も雇い入れた。ただ、経験がある鋳物職人といっても家庭の鍋釜類が鉄製中心の頃で、たいてい銑鉄鋳物工出身者である。また新地金と異なり含有物のある再生塊も扱うため、最初は付きっ切りで教えなければならない。営業活動も繁一がほぼ一人で担った。

当時の業績の断片が見つかっている。3月の一か月間の再生地金生産高は6,113キロ。また「利益768円」と帳簿に記す。ビール大ビン50銭、大卒銀行員の

初任給が48〜50円、造幣局職工の給与（ともに月平均換算）が55円ほどの頃である。

昭和へ、株式会社設立へ、今日へ

1926（大正15）年は、繁一にも大紀アルミにも節目の年となった。

5月、父林兵衛が亡くなった。享年73は、当時としては長命の方である。ふろさとで農業をし、たくさんの子をもうけ、好きな酒屋も開いた。当時の酒樽は生家に運ばれ、繁一はふるさとに帰った折、それをじっと見た。そして先祖代々を祀る墓に足を運び、苔が少しついた墓石を磨いた。兄の重吉が、「すごい勢いで磨いていたようすは鮮明に覚えている」と、後に自分の子どもたちに話している。墓に向かって、今後の成長を約束した姿にはかならなかった。

同じ5月、大紀アルミは会社の土地建屋を買い取り、借りものではない名実とも

に自社工場とした。父の他界よりずっと前から計画していたことであった。

時代は昭和へと移り、1927（昭和2）年に繁一の再生塊は「日産1トン」の水準に達した。1929年には日産2トンに倍増させた。圧延会社に出荷できるようになったのは1930（昭和5）年のこと。市場で、業界内で、信頼されるようになった証左といえる。同年は、大学教授を顧問として招聘しアルミの構造解析に着手するなど品質管理面にも本腰を入れ始めた年で、早くもその成果が表れた。

1933（昭和8）年には、再生地金の原材料であるアルミ屑の輸入量（4,598トン）が、新地金の輸入量（3,549トン）を初めて上回る。アルミ再生地金の定着とその後の進展を示唆する出来事と、繁一は確信した。予想どおりにアルミ再生精練という事業が年々成長していったのは、周知のとおりである。

昭和10年代、軍靴の響きが増していくとともに生活も産業も混迷の時代を迎えていく。着実に成長していったアルミ再生塊関連も、当然のように製造過程のすべてが国の経済統制の枠に組み込まれていった。国内産業の中でも重要素材と位置づけ

られるまでに成長したゆえンである。

その後、会社が統合会社となり、繁一は再び海を渡る。朝鮮半島でのアルミ精練計画に乞われて参画するなど、精力的な日々を過ごした。「縁あって、この金属に出逢うことができた、その感謝の気持ちで何事にも取り組みたい」という自らの想いを、いつも抱いて行動した。そうした第二次世界大戦前後の当社の動き等については、既刊『大紀アルミの40年』に記している。



合資会社大紀アルミニウム工業所全景

1948（昭和23）年——大阪へ出て43年、独立・創業から26年を経て「株式会社大紀アルミニウム工業所」を設立した。資本金150万円、従業員24人。山本繁一、58歳の秋であった。

1949（昭和24）年——のちの第2代社長 山本暉郎が入社した。“大紀”の言葉を世に出した「合資会社大紀アルミニウム工業所」の設立と同じ、1924（大正13）年の生まれであった。

1950（昭和25）年——繁一が生を受けてからちょうど60年後、初孫である山本隆章が誕生した。祖父と同じ寅年生まれ。第3代社長となるのは1994（平成6）年のことである。

そして歴史は、今日に続いている。

エピソード①

山本繁一社長と社員たち

大紀アルミには、繁一の意向もあつて1948（昭和23）年の株式会社設立当初から、いやそれ以前から、多くの和歌山出身者が勤務している。

繁一は、社員たちに厳しく接した。

工場を見回り、原材料の選別など仕事が思うように進んでいないときは、「とても怖い顔で、叱られた」と、OBは回顧する。「最初は、目を合わせるのも怖いと思う時があった」と。とにかく失敗できないという以前の想いと、この若者らを早く一人前にという気持ちだが、自然と創業社長の厳しさを育んだ。

その同じ社員は、こうも言う。「とても優しかった」。

工場に入ってきたときは、社員に渡そうといつも何かを

持っていた。「よく覚えているのは、コッペパン。当時は食糧の配給でもらう貴重品です。他にはあんこの入った餅。おいしかった。よく働いている者に、社長は『内緒や』と言って渡していました。えこひいきですね」と、ほほ笑む。繁一は、働きぶりも含め社員のことをよく見た。面倒見がよかった

和歌山をはじめ遠方から来た社員は、会社の寮に住んだ。その中の一人がこう話す。「寂しかったり、悲しかったりするときは、いつでも相談しに来い。何でも言うて来い。社長は、そう言ってくれました」。ふるさとを離れ、親や家族と別れて大阪で暮らす気持ちは、繁一には痛いほどにわかった。

大阪はミナミの界限で繁一は会食をすることが時折あったが、社員たちは「いつもの社長の行く店」を知り、わざと周辺をうろうろする。そこで繁一に見つけられると、



山本繁一 還暦の頃

必ず「早く家に帰れ」と叱られる。「これで何か食べて帰れ」と千円札を出しながら。大卒銀行員の初任給が1万円を超えた頃の話である。この社員たちの作戦は、繁一もわかったうえのこと。それでも、いつも同じように叱って、ことさら難しそうな顔をして小遣いを渡した。

社用車の運転手がけがをしたときは、休職中も給料を支払い、復帰後も「できる仕事をしたらしい」と、負担の少ない別の部署で勤務を続けさせた。「私には、いつも優しい社長でした」と当時を思い出す。

1969（昭和44）年4月、ふるさと和歌山を出て約65年、繁一は大阪で永い眠りについた。享年78。

山本繁一とふるさと和歌山

繁一は、蓄えができれば生家を建て替えたいと考え、1937（昭和12）年に願いを実現した。前後して、兄重吉からの借金も返済した。その少し後には、あの大坂築港での恩義を少しでも返そうと、生家を継ぐことになる重吉の長女幸子（前出）に田んぼ1丁歩（3000坪）を買える金額を渡した。

兄重吉は、1943（昭和18）年に64歳で亡くなった。ふるさとに帰った折に、兄がアメリカとの往復にいつも使っていたトランクを見た。幸子が大切に保管していた。

1955（昭和30）年秋、繁一は仕事の合間を見て和歌山に帰郷した。株式会社設立から7年ほどが経つ。事業も軌道に乗ってきた。大阪に出てから、ちょうど50年。がむ

しゃらに生きてきた「切目」に、と繁一は考えた。

街へ出てみた。印南駅近くの商店街では舗装工事が進み、通りには一定間隔でぶら下がる鈴蘭灯がついていた。ちょうど、この年の6月に完成したと、印南町史に記録が残る。同町史は、「1957（昭和32）年頃に扇風機普及、電気釜の人气が上がる」とも記す。

切目駅の方に行った。林兵衛がやっていた酒屋を探したが、見つからなかった。

次の朝、繁一は5時前に目を覚ました。布団をたたみ、さっと着替える。いつもの長袖の白いカッターシャツに、濃いグレイのズボン。庭に出て井戸で手を洗い、口をすすぐ。部屋に戻って神棚に手を合わせ、仏壇の前で30分ほど経を唱え目を閉じた。浮き沈みがあり、扱う品の少しの値動きが業績を左右する仕事に加護があるように、そして何よりも代々の先祖への感謝を忘れないように、この時間を

つねに大切にしてきた。

真新しいタオルを左肩にひょいとかけ、繁一は外に出た。

後ろには、小学校に入る前の孫の隆章が手桶を持って続く。繫一お気に入りの白いシャツと紺の半ズボン姿。ともに代々の先祖の墓をめざして、門を出た。

その瞬間、キューツ、キューウイツ――。

高く鳴く野鳥の声。

二人が山を見上げる。

空は、すべて青かった。

(完)



両親 山本暉郎・喜代 と 山本隆章 1歳の頃



現在の生家

—あとがき—

創業100年に関する打合せの中で出てきた「大紀アルミができるまでの足跡を本にしてはどうか」という山本社長の言葉から、このプロジェクトが始まりました。

まず2022年4月、創業者山本繁一の出身地 和歌山県日高郡へ取材に出かけ、自然あふれるこの地から大志を抱いて大阪へ出た当時に思いを馳せ、大紀の「紀」の意味を改めて強く意識しました。

一方、創業時の資料は散逸していました。大阪アルミニウム製作所（現日本軽金属株式会社）の創業者稲田實之助氏の孫である稲田実氏にご協力いただき、両氏が共に働いていた池田アルミニウム器具製造所の時代を記した資料を拝借、頼れる資料となりました。

他の資料収集や取材も進め執筆していきましたが、不点が多く、時代推移や世相等から推察して綴った所も少なくありません。ご理解いただきましたら幸いです。

お忙しい中、貴重な資料の提供や取材協力と共に手厚くおもてなしいただいた山本吉彦・節子様、有用な資料を提供いただいた稲田様、「繁一社長」への想いを聞かせていただいたOB・OG等々、ご協力いただいた皆様に深く感謝申し上げます。

最後になりましたが、執筆は周年記念誌等でお世話になっている佐柄秀樹氏に依頼しました。資料が不足し、時間もない中で一からの書き起こしとなりましたが、記念誌とは異なる味わいある一冊に仕上げていただきました。本当にありがとうございました。

創業100年記念誌編纂委員会

—主な参考文献—

「アルミ産業50年の歩み」
社団法人アルミニウム連盟
社団法人軽金属協会
「稲田實之助 榎之助兄弟」
稲田幸次郎編
「印南町史 通史編上・下・資料編」
印南町
印南町ホームページ
「営業品目録」
池田アルミニウム器具製造所
「大阪アルミニウム製作所四十年史」
大阪アルミニウム製作所
大阪市ホームページ
「大阪近代史話」
大阪の歴史研究会
大阪府ホームページ
「家計調査年報」
総務省統計局

「切目小学校創立百周年記念誌」
印南町立切目小学校
「近代日本総合年表」
岩波書店
「造幣局百年史」
造幣局
「続日高郡誌 上巻・下巻」
和歌山県日高郡
「大紀アルミの40年」
大紀アルミニウム工業所
「日本長期統計総覧」
総務省統計局
「日本統計年鑑」
総務庁／総理府統計局
「日本の歴史 13 近代日本の出発・14 二つの大戦」
小学館
「値段史年表 明治大正昭和」
週刊朝日編
「民間給与実態統計調査」
国税庁
和歌山県ホームページ



山本繁一の足跡

2022年11月 発行

株式会社大紀アルミニウム工業所
創業100年記念誌編集委員会
大阪市西区土佐堀1丁目4番8号

構成 — Lapid

執筆 — 佐柄 秀樹

デザイン — TEN-da SANA 後藤 典子

印刷 — 株式会社KINSEI